

ボランティア活動推進フォーラム西日本大会

ボランティア活動 その新しい可能性



おもてなし

社会の構造や環境の変化により、地域社会における人間関係が希薄化し、個人が主体的に地域や社会のために活動することが少なくなってきたとの指摘がある。

こうした状況の中、相互に支え合うような地域社会の実現をめざし、地域社会全体でボランティア活動を推進していく必要がある。

こうしたことから、本大会は、日常的にボランティア活動が行われるよう、気運の醸成を図り、大人が子どもたちのボランティア活動を支援することで、子どもと大人の絆が深められ、地域教育力の活性化が図られることを願って開催するものである。

プログラム

10:30～10:45 開会行事

10:45～12:00 基調講演



「ボランティア活動 その新しい可能性」



社会福祉法人世田谷ボランティア協会理事長

こう
ろき
興
枠

ひろし
寛
さん



□1948年、宮崎県生まれ。新聞記者として国内外を取材。新聞社退社後、社団法人日本青年奉仕協会（JYVA）研究開発室長、事務局長、理事として国内や国際的な「長期ボランティア派遣計画」を創設。さらには、全国のボランティアネットワークの開拓、学校教育・社会教育における「ボランティア学習」の普及、国連機関をはじめ世界のボランティア活動推進機関との国際会議をプロデュース。現在は、昭和女子大学をはじめ、日本社会事業大学、恵泉女子大学、信州大学、拓殖大学、岐阜県立看護大学、NHK学園等で教鞭を執る。専門は、「ボランティア論」、「生涯学習社会論」、「青少年と社会教育論」。

□役職

中央教育審議会委員（生涯学習分科会、初等中等教育分科会）

日本ボランティア学習協会副代表理事

日本ボランティア社会研究所副代表理事

全国体験活動・ボランティア活動総合推進センターコーディネーター 他

□著書

「希望へのカ一地球市民社会のボランティア学」（光生館）

「ボランタリズム—現代のエスプリ」（至文堂）

「異文化理解—現代のエスプリ」（至文堂）

「英国の市民教育」（日本ボランティア学習協会） 他

こう
ろき
興
枠
寛
さんの
プロフィール

■期 日／平成18年1月15日(日)

■会 場／ときわ湖水ホール(山口県宇部市)

■主 催／文部科学省・ボランティア活動推進フォーラム西日本大会実行委員会



「ボランティア活動 その新しい可能性」

社会福祉法人世田谷ボランティア協会理事長
興梠 寛さん

はじめに

興梠と申します。

みなさんの中にはボランティア活動を通して、かなり人生を変えさせられた方や、自分自身の顔やライフスタイルまで変わってしまったという方もたくさんいらっしゃるのではないかと思います。

今日は「ボランティア活動 その新しい可能性」というテーマをいただいたわけなのですが、ご存じのように、ボランティア活動といつても大変広い領域です。今日は、青少年自身がボランティアを通してどう育っていくか、また、私たちが青少年を育て、応援していくために、どうボランティア活動をしていけばいいのかという、青少年のことに絞ってお話をさせていただこうと思っております。

日本はHikikomori society ?

さて、昨年の11月、日本とEUとの間で、政府関係者と、専門家と、ボランティア活動をやっている非営利団体、NPOの方たち、政府関係者と、研究者と、実践者とが一堂に会して青少年教育に関する会議が約5日間にわたって行われました。日本からは、内閣府、文部科学省、外務省のスタッフの人たち、主に学校外教育や青少年の心理に関する研究者、青少年の社会参加を育てていくという活動者の人たちなどが参加し、私も、そのメンバーに加わらせていただきました。

会議の中心のテーマは3つありました。1つ目のテーマは、ニート、フリーターの問題、2つ目は、社会に適応することができないさまざまな課題や問題を抱えている青少年の問題、3つ目は若者の社会参加に向けた環境づくりについてです。

その中で大変注目された言葉は“Hikikomori”です。何かわかりますか。「引きこもり」です。この「引きこもり」という日本が持っている独特の社会的な課題は、ヨーロッパにはないということわかりました。つまり、ヨーロッパの政府や、研究者や、さまざまなボランティア活動を行っている人たちの間で、一躍注目を浴びた言葉になりました。この「引きこもり」という言葉は、幸か不幸か、日本が生んだ独特の社会現象です。自分以外の他者、家族をも接触するということを拒否してしまう、子どもたちや、若者たちの問題です。

そのとき、ヨーロッパの研究者の1人から聞かれました。「日本は、Hikikomori society、引きこもり社会なのか？」というふうに。うまいこと言うものですね。そう言われて、ふと思いました。そうかな、これは、子どもたちだけの問題なのかな。ひょっとすると、日本の家庭も引きこもり化しているのではないか。だんだん孤立化しているのではないかと、そういったことも感じました。

「子育てって大変ね。」

また、皆さん、どう思われるかわからないのですが、私の友達もたまたまイギリスから来ておりまして、こんなことを言っておりました。

「日本の街角では、子どもをもつお母さんたちの間で、こんな会話があるのをよく聞く。『ああ、あなたのうちには子どもがいるの。子育てって、大変ね。』というふうに言っている。日本語が堪能な友達なのですが、これを何て英語にしていいか分からず。何で日本の親たちは、『子育てが大変

ね、子育ては大変ね』と言って、お互いに慰め合うのだろう？子育てというのは大変なもの、子育てというのは苦労の多いものという観念が、日本の社会の中に、もう行き渡ってしまっているのではないか」というようなことを言っておりました。

私はそれに対して、「じゃあ、イギリス人は何て言うのだ」と聞きました。そうすると、「子育てというのは、苦労の多いもの」、「子育てというのは本当に大変なものだ」というような言い方はしないというのです。「あなたの家に子どもがいるの。子育てって、本当にハッピーですね。」「子どもがいるの。子どもを育てているの。子育てって、本当にハッピーな、幸せなことね」ということは言うけれども、苦労の多いものと言うことは、絶対にないということなのです。

子育てへの意識は確実に悪化

今日御用意しました、最初のペーパーのところのデータ【→P24】、ちょっと紹介してありますけれども、幼稚園や、保育園や、小学校1年生のお子さんをもつお母さんに質問をしています。それを見ますと、約50%が、「子育ては自分に向いていない」というふうに答えています。そのお母さんのお母さん世代、いわゆる子どもにとっておばあちゃんの世代に聞いてみると、約20%が「向いていないと思う」と答えています。

「子どもを十分愛していないかもしれない」と答えているお母さんは、何と4人に1人くらいいらっしゃいます。おばあちゃん世代は13%ということです。

つまり、これは確実に日本の社会では、おじいちゃん、おばあちゃんの世代から、今、見てみると、子育てということに対して「大変だ」と思っているお母さんたちが増えているということになるわけなのです。

進む家庭の孤立化

以下は、いくつかのさまざまなデータの紹介をしておりますけれども、いったい何でそんな時代になってきたのかというところ、これは、やはり私たちは、よく考えてみなければならないと思うわけです。

ひとことで言いますと、私は日本の家庭というものが、だんだん、だんだん孤立していっているという、そういういたイメージでとらえているわけです。

まずひとつは、これはご存じのように、私たちの生活習慣は変わっていく。それは、どう変わっているかと言いますと、三世代同居するという家庭もだんだん少なくなっています。本當ですと、お父さん、お母さんは現実的ですから、学校の成績が悪いと子どもを叱ったりします。運動会に行ったのだけれど、何でお前は、かけっこが遅いのだということも言います。

しかし一方で、おじいさんやおばあさんが家庭にいますと、もうひとつの関係をそこにつくってくれます。孫の学校の成績が悪いと言って怒るおじいちゃん、おばあちゃんは、ほとんどいないと思います。かけっこが遅いからと言って叱るおじいさん、おばあさんも、いないと思います。だいたい、こんなところがキーワードです。おじいちゃん、おばあちゃんが孫に言う言葉は「まあ元気で、いい子であればいいや」というところでしょうか。そうした言葉や接し方が、どれだけ子どもたちにとって救いになっているかどうかはわからないのですが、しかし、残念ながら、家庭では、そういういた関係というものも、だんだんなくなってきております。

子どもの数も、御承知のように、どんどん少なくなってきて、このような家庭を見ますと、親と子が一緒にいる。そこに、おじいちゃん、おばあちゃんは、なかなかいない家庭になっていく。そして、子どもの数、きょうだいの数も少なくなっていく。そしてまた、社会も変わってきて、同じ地域の中で、いとこや、親戚や、血縁関係のある人たちが一緒に暮らしているのも、だんだんだんだんなくなっていくことになるわけです。

私の母親は7人きょうだい、父親は11人きょうだいです。そのおじさん、おばさんの名前、戦争

で亡くなったおじさんもいましたけれども、その人たちが産んだ子ども、全部を覚えるのには、えらい苦労をしました。このように、たくさんの家族に、様々なことを教えられて育っていきました。そういうたるものも、なかなか求められないような時代になってきました。

問題を生む構図

つまり、家族というものが、どんどん小さくなっています。そして、小さくなった家族の中で子育てが行われているわけです。しかし、いまだに、まだ日本の父親は、母親に子育ての全てを任せて、「仕事が忙しいからだ」と言って、子育ての責任を拒否しているケースも多いわけです。そうしますと、お母さんは、そういった孤立化した家族の中で、隣近所の付き合いもなかなかない、そういう中で子どもと向かい合わなければならぬことになります。

そして、子どもがお母さんの言うことを聞いてくれるうちはいいのですけれども、だんだん成長、発達していくなかで、子ども自身が自分の存在を主張していくようになっていきます。そうすると、「思うようにいかない」という悩みも出できます。相談しようにも、男たちは外で勝手なことをやっています。

そして、今度は一方で、子どもも、お母さんに対してストレスを感じていくようになります。つまり、親と子がストレスを感じ合って、自分自身が、その解決のために相談をしていくことが、なかなかできない状況になっていくわけです。

そこで、さまざまな問題が起こってきます。例えば、子どもが親に危害を加えていく。場合によつては、死に至ってしまう。親が、ストレスのために子どもに危害を加えていく。さまざまなかたちで、家族というものが実は変わっていっているということになると、私は思います。

「縁側」が失われていく

日本の家庭から、各家の構造では縁側がなくなったというふうに言います。今、ツーバイフォーや、さまざまな建売住宅があるのですが、まだまだ、どうも、昔あった縁側というものが見直されているというふうにはならないようです。私は、私の友達の建築家によく言います。どうせ建売をつくるのだったら、広い縁側をつくるような構造を、もっともっとやつたらいいんじゃないかというふうに言います。

ご存じのように、昔は、各家々には縁側というものがあって、そこで、私はよくひなたぼっこをしたり、そのときに、隣のおじさん、おばさんがおいしいものをつくって持ってきてくれたりして、縁側というのは隣近所の交流をしていく、とても大事な場所でした。つまり、お隣さんに開かれた家の構造になっておりました。

まちには、家の縁側だけではなくて、私たちみんなが自然に交流し合っていく「まちの縁側」もなくなっていました。つまり、家庭というものが孤立化し、家庭の教育力というものが低下していくと同時に、まちの中で、私たちの地域の中で、お互いに、自然に協力し合い、助け合っていき、子どもを育していくという地域の教育力というのも、だんだん低くなっていくような感じがします。

子育てのエネルギーをどう取り戻すか

教育力の一番の源というのは、やはり家庭だと思います。家庭の教育力が低下して、地域の教育力が向上するはずは、絶対、これはないわけです。つまり、こうした家庭や地域の教育力というものが低下していく中で、子どもたちが育とうとしている。こうした現状というものは、おそらく、その社会に未来があるはずはないわけです。

もうわかっていることですけれども、家庭の子育てをしていく、そういうエネルギーというものをどうやって取り戻していくか。また、そういうものを原点にしながら、地域の子どもが育っていくエネルギーというものを、どういうふうに育てていくか。

これは、実は私たち日本の社会、国家存亡の危機に関わるというくらい、最も重要なテーマだと私は思っているわけです。こうしたことに、私たちはみんなが協力し合って、手を携え合って、この問題に取り組まない限りは、もう私たち日本の社会の未来はないと、いつも海外に行きながら、日本を見て、思っているわけです。

世田谷ボランティア協会の設立

こうした状況に対して、じゃあ、取り組んでいこうというときに、青少年のための活動をしているボランティアや関係者だけが集まってやつたら、それでいいのかというのは、私は、絶対そうではないと思うわけです。

私の肩書きの中に、世田谷ボランティア協会の理事長というものがあります。私は、約80万人近い人たちが暮らしているという東京都内で一番大きな区である世田谷区内に住んでいて、この世田谷ボランティア協会というのは、今から26年前、1981年のことなのですけれども、ボランティア活動、さまざまな活動をしている人たちが集まって、自分たち市民の手、ボランティアの手で運営していくボランティアセンターをつくろうではないかということで、約150のボランティア団体が横につながりを持ってつくったわけなのです。

私は現在、4代目の理事長をやっておりますけれど、3代目は牟田悌三さんという、「ケーキ屋けんちゃん」のお父さんです。実は牟田さんも、世田谷で子育ての問題やPTAの活動を熱心にやっておられました。私は海外協力をやっているボランティアとして協会の運営に参加をしたわけなのです。

ということで、世田谷のボランティアグループが、連絡協議会に参加していた150団体をネットワークしてボランティア協会をつくりました。最初は、スタッフはたった1人置いて、商店街の真中の一室を借りて、みんなで運営するボランティアセンターを始めました。朝の10時から夜の10時まで、土曜日、日曜日もオープン。たった1人の職員は、潰れてしまいます。当然、ボランティアセンターの運営から、相談から、みんなで手分けして行いました。ですから、私たち役員やボランティアセンターの運営にかかわっている者は、みんな「ボランティア相談」の経験があります。小さい小学生からお年寄りまで、さまざまなボランティアをしたいという人たちのニーズに合わせて、どのように活躍の舞台をつくるかということを一生懸命やってきました。

こうしたボランティア協会、今では非常勤を含めて約90人近いスタッフを抱えていくという大きな民間のボランティアセンターになったわけなのです。大きいことは決していいことではなくて、Small is beautiful、小さいことほどいいということを、いつも肝に銘じながらやっているのですが、大きな組織というのは、なかなか運営というのは大変なのです。

冒険遊び場プレーパークの開始

この私たちの協会の中で、ボランティア活動を育てたり、応援したりしていくというような中心になっていく活動だけではなくて、大変、今大きく成長している取組みがあります。これが子どもたちの問題です。

ご存じの方もいるかもしれません、私たちは、今から26年ほど前に、このボランティアセンターができると同時に、地域の住民が子どもたちの問題に取り組むプロジェクトを始めました。それが「冒険遊び場プレーパーク」というものです。

自分の責任で自由に遊ぶ。そこに行けば、「禁止すること」を禁止する。つまり、子どもたちはそこに行けば、本当に遊びたいという遊びをすることができ、自分の責任で自由に遊ぶ。そして、大人たちは、子どもたちの遊びを指導するのではなくて、子どもたちが潜在的に持っている遊ぶ能力を引き出してあげて、それをもっともっと応援してあげようという、『冒険遊び場プレーパーク』という運動を、世田谷区の応援を受けて始めたわけです。

冒険遊び場プレーパークでは、火を焚くこともできます。木の上におうちをつくることもできま

す。掘ろうと思えば、地球の裏側まで穴を掘ることもできます。子どもたち自身がつくりあげていく遊び場です。大人たちがつくって与えるのではなくて、子ども自身がつくりあげていくのですから、1年中、この冒険遊び場プレーパークは様子が違います。つまり、景色が変わっていきます。

それはたくさんの、いわゆるボランティアの手によって担われています。この活動の中核は、小さい子どもをもつお父さんやお母さん、そして何よりも、高校生や、大学生や、若者たち世代なのです。私たちは、東京の世田谷の4カ所にプレーパークを運営しております。いまでは全国約220カ所にこの運動が広がっています。

プレーパークは「縁側」

先ほどの縁側ということから言いますと、私たち冒険遊び場プレーパークは、子どもたちと大人社会を結んでいく、いつでも子どもたちが行きたいと思えば行くことができる、ある面では縁側のようなものなのです。

子どもたちのためのプログラムというのは二通りあります。例えば、私たちが土曜日や、日曜日や、学校が終わった時間のときに、青少年が参加できる、さまざまなプログラムをつくって、参加しませんかと訴えていって参加してもらう、そういういたプログラムがあります。もうひとつは、子ども自身が、いつでも自分の生活の中で選んでいくことができる、つまり、常設化されているような、そういういた子どもたちが会える場もあります。これは、どちらとも大事です。ですから、子どもたちのプログラムを組んでいくときに、ただプログラムをつくって呼びかけていくというだけではなくて、できれば一方で、地域の中に子ども自身が、自分のライフスタイルの中で選んでいいける、そういういた場があるといいです。

よく、各地に行きますと、こんなことを聞きます。「子どもたちに、たくさん、いろいろな楽しいプログラムや、有意義なプログラムをつくって用意しているのだけれども、なかなか子ども自身が参加しない。奪い合いになってしまっている。どうすればいいのか。」

これはどこでも、私たち世田谷でも起こっていく問題です。でも一方で、常設化した、こういった遊び場の場合というのは、また違った状況でもあります。例えば、私たちのプレーパークを見て観察していますと、1週間に15分ずつ、2回しか来ないという子どもがいます。それはどういうことかと言いますと、子どもは学校に行きます。学校が終わって、ランドセルを背負って、プレーパークに子どもが現れます。見ていると、たった15分間だけ遊んでいます。そして、忙しそうな顔つきをして、周りのプレリーダーや大人たちに聞きます。「お兄ちゃん、今、何時」、「お姉ちゃん、今、何時」、ショッちゅう時間を気にしています。もちろん、その後に塾があるからです。ちょっと15分ぐらい遊んで、そして、追われるよう塾に向かって、ランドセルをしょって走っていきます。そして、また薄暗くなっていく時間になってきますと、ふっと見ると、また同じ子どもが来て、15分間、火を焚いています。そしてまた、「おじちゃん何時」、「お兄ちゃん、何時」、「お姉ちゃん何時」と言って、15分経ったら、また家に帰って行きます。

しかし、それでもいいわけなのです。つまり、これは子ども自身がライフスタイルの中で選んで参加していく遊び場でもあるのです。ですから、ある面で有意義なプログラムをつくって子どもたちに提供していくというものもあれば、できれば日常の子どもたちの生活の中で、ちょっとだけ非日常の世界と言いますか、学校でもない、塾でもない、家でもないという、そういういた人々と出会ったり、体験するような場があると、もっといいです。

というふうに、子どもたちが集う場というものは、もっともっと頭を柔軟にして、多様に場面を地域の中で用意していくといいです。どれが正しいとか、どれが間違いということではなくて、子ども自身が選択をすることができる、そうした子どもたちの居場所というものをどうつくりていくかということも、とても重要なテーマだと思います。

三角から四角の関係に

私は、子どもの暮らしというのは、今、家庭と、学校と、塾との間の三角関係に、実はあるように思うわけなのです。これを、できればもうひとつ、四角の関係にしなければいけない。つまり、もうひとつの子どもたちの居場所というものをつくっていくということが大事だ。これがおそらく、文部科学省あたりが子どもの居場所づくりといって全国で推進していこうという大きな理由のひとつだろうと思います。

このように、学校と、家庭と、塾だけではなくて、もうひとつ、子どもたちが自分自身を回復することができるような居場所というものをどうやってつくっていくかということも、ひとつの大きな課題だと私は思います。私たちがやっている、この冒険遊び場プレーパークというのは、実は、そういう場でもあります。

脱競争、脱管理、脱市場の原理

このプレーパークには、競争主義というものはありません。ですから、勉強ができるか、できないかで人間を判断しません。かけっこが速いか、遅いかで人間を判断するわけではないのです。つまり、脱競争の、競争社会の原理で動いているということではなく、子どもたちの持っている価値や可能性というを見いだしていく場でもあります。

また、子どもたちを管理する場でもありません。つまり、管理社会ではないわけです。子どもたちに、いちいち最初からルールを当てはめて、これに従えというのではなくて、子ども自身が、できれば失敗を重ねていきながら、自分自身が、人と付き合ったり、みんなで楽しい暮らしをするためにはどんなルールや約束事が必要なのかということを、自分の手で体験をしながら感じ取っていく場もあるわけです。つまり、脱競争の社会であると同時に、脱管理社会でもあるわけです。

また、三つ目は、脱市場の社会もあります。つまり、お金を持っているからとか、お金主義ということで動いていくものでもないです。プレーパークは、そういうのはないわけです。もちろん、家庭のもっている経済的な背景には関係なく、子どもたちはプレーパークで遊ぶことができますし、また、そこはたくさんのボランティアの人たちがかかわっていくことによって、無償ということの大切さということを教えてくれる場もあります。

つまり、脱競争、脱管理、脱市場という、そういった大きな価値ということを大切にして動いていく世界もあります。

大人も自分らしさを取り戻す場

私は、何でこんなちょっと小難しいことを言ったかといいますと、実は私たち大人は、そうです、会社に行きますと、私たちは管理社会であり、競争社会であり、市場経済の原理で動いているわけです。

しかし、一方で、管理と、競争と、市場原理で動かない、私たちの居場所というのも、大人も必要です。そこに行けば、例えば肩書きでものを言わない。そこに行けば、会社の社長も、労働者も、同じ人間として人間関係をもつことができる。そういった場が必要です。そしてまた、お金で物事を判断するのではない、もっと大事な人間関係をつくる場も必要です。肩書きでものを見ること、勝ったか負けたかで、私たちは評価をしていく、そうではない社会も必要です。

私は何を言おうとしていると思いますか。実は、ボランティア活動のことを言いたいわけなのです。ボランティア活動というのは、脱管理、脱競争、脱市場ということです。また、私たちの日常とは全く違う世界の中で動いています。

もし、私たちが会社に行って、仕事をして、その帰りにボランティア活動の場に参加したときに、会社と同じように、例えば私がボランティアグループの会合に、今日の夜、行ったとします。入口のドアを開けて壁を見ると、私のボランティアグループのメンバーの名前が全部書いてあって、グ

ラフが書いてあったとします。いかに寄付金を集めたかによってグラフがあって、成績の悪い人間はそこで罰ゲームがあるということになると、行きたくないですね。

ボランティア活動の場に行ってみたら、みんな肩書きがあって、会長、副会長、幹事長から、部長、課長まであって、全部その肩書きで名前を呼ぼうなんて言ったら、行く気がしませんね。そして、何でも私たちの活動をお金で換算してしまう。それだったら、もう行く気がしません。

ボランティア活動というのは、私たちの日常の社会とは違った価値ということを大事にしているからこそ、私たちはそれが楽しいし、また、ふっと息をして人間性を回復するといいますか、これは自分らしい生き方ということを発見できる場だなと思うわけです。

子どもたちが自分らしい自分を再発見する場

また元に戻しますと、子どもたちが日常の暮らしの中で、そういった息を吹き返していく、自分が、本当に自分で、自分らしい自分というものを再発見していく場というのは、絶対に日常の中で必要です。それはやはり、家庭や、学校や、塾という、三角関係の生活の中では得ることができないのです。

こうした場を、いかに子どもたちのために、地域の中で、また、日常の生活の中でつくりだしていくかということは、とても大事なことです。特に私は、家庭から子どもをいかに離すかということが大きなテーマだと思います。

基本的な価値観や考え方を持つこと

ところが、私たちのボランティア活動、子どもたちや青少年のための活動を見てみると、場合によっては、先ほど言いました競争主義や、管理主義や、市場経済主義を持ち出して、自らの活動をだめにしているケースもないでしょうか。

つまり、子どもたちの育っていく環境を、私たちは、家庭でもない、学校でもない、塾でもないというときに、どんな環境を用意していけばいいのかという、その基本的な価値観や考え方というものをきちんと持つべきです。ただ、子どもたちを集めて遊ばせればいい、大人たちが子どもたちを育てたいという虚栄心だけを満足させていく場であっては絶対にならないわけです。

つまり、私たちは、「ボランティア活動を通して子どもたちにどのような社会環境を用意していけばいいのか」という根本となる、価値観、考え方、哲学というものを持たなければいけないということを、いつも私は痛感します。

この冒険遊び場プレーパークという運動の原点は、実は、ヨーロッパなのですけれども、北欧で起こって、イギリスで発展しまして、私たち世田谷で、私たち仲間の先駆的な取り組みによって、「羽根木プレーパーク」というものが誕生し、今では、この世田谷で生まれたプレーパークの運動は、全国で220カ所以上に広がっているわけなのです。

こうしたプレーパークの運動を、20年以上、行ってきた。つまり、ボランティアセンターの大きな役割というのは、いつも子どもたちを原点にして、子どもたちを育てていく活動に、世田谷区民の人たち、みんなが参加していこうということなのです。

大人に向けたSOSやメッセージ

また、もうひとつ、子どもたちの大きなプロジェクトがあります。10年ほど前から、私たちのプレーパークには新しい現象が起こるようになりました。つまり、冒険遊び場だけではないような現象が起こるようになってきました。

さまざまな子どもたちが、さまざまな問題や課題を抱えて、プレーパークに駆け込んでくるようになりました。「学校に行けない」と思って悩んでいる子どもたちがいます。お父さんやお母さんが泣いて、「行ってよ、行ってよ」と子どもたちにお願いします。一生懸命、行こうと思えば行こうと

思うほど、身体に変調をきたして行けないという子どももいます。いじめに遭って、SOSを求めてくる子どももいます。そして、最近増えているのは、さまざまな理由で子どもに虐待をする親と子の関係です。それから、人生の進路に悩んだり、友達ができなくて悩んだり、さまざまな問題を持ちこんで、プレーパークに子どもたちが来るようになりました。

このプレーパークの中で、さまざまな子どもたちが、大人に対するSOSやメッセージというものを抱えてくるようになりました。どうもおかしいな、子どもたちの間にいろいろな問題が起こっているということを、私たちは冒険遊び場を通して、肌で感じるようになりました。

世田谷チャイルドラインの開始（10年前）

そこで生まれたもうひとつの活動、それが「チャイルドライン」という活動です。このチャイルドラインという活動は子どもたちのための専用電話です。18歳までの専用電話というものを、私たちはつくったわけです。

このアイデアのヒントになったのは、イギリスなのです。イギリスでは、今から約20年ほど前から、チャイルドラインというボランティア活動が生まれています。この背景になったのは、また、もうひとつイギリスで生まれて世界に広まったボランティア活動がベースになっています。

それは、イギリスでは「サマリタンズ」（Samaritans）と呼ばれている活動なのですが、日本では「いのちの電話」と訳されております。瞬く間に、1950年代から世界中に広がった、この、日本では「いのちの電話」と言われている、イギリスでは「サマリタンズ」と言われている活動。日本では、約50カ所の地域に、ボランティアの手によって開かれていって、24時間×365日、人々のさまざまな悩みを聞くというための専用電話というものができあがっております。

これは、プレーパークに続く第2弾、子どもたちのための世田谷区民みんなが協力し合って活動していくこうというところで生まれ出されました。「世田谷チャイルドライン」という活動なのですが、それが10年ほど前に生まれたわけです。

チャイルドラインの持つもうひとつの目的

イギリスの、このチャイルドラインの活動を紹介いたしますと、このチャイルドラインを通して、イギリスでは24時間×365日、いつでも子どもたちが話をしたいというときに話をすることができる電話です。

この電話は、子どもたちが悩みや苦痛を聞いてもらうだけの電話ではなくて、どんなことでもいいのです、つくり話でもいいのです、自慢話でもいいのです、今日の一日の報告でもいいのです、うわさ話でもいいのです、とにかく、話したいことを何でも受け止めてくれる、聞いてくれるという電話なのです。

いま、全英6カ所に開設されておりまして、「眠らぬダイヤル」として、いつも子どもたちが電話をしてくれることを待ってくれています。これは、実は子どもたちが電話をしてくれるということだけが目的ではありません。もうひとつの大きな目的があります。それは、大人と子どもとの信頼の絆をつくりあげていくという意味があります。

これはどういうことかと言いますと、かけてくるだけではなくて、「いつでも、あなたが悩みや、人生に迷ったときに、いつでもあなたが電話をしてくれるのを待っていてくれている人がいるのだよ」ということを知ってもらいたいということです。

別の言葉で言いますと、「あなたは、孤独ではないですよ」「どんなに自分が自分を失いそうになつて失望しても、あなたは、あなただけではないですよ」「必ず、あなたと一緒に寄り添って、24時間、あなたのことをいつも待ち続けている人がいるのですよ」ということを子どもたちに知つてもらうということなのです。つまり、子どもと大人との信頼の絆というのを、いつも保っているということなのです。ですから、電話をしてくることだけが、実は大事なことではないわけなのです。

英国チャイルドラインの運営の仕組

この英国のチャイルドラインは、たくさんのボランティアによって運営されております。そして、全英6カ所に開設されております。このチャイルドラインは、子どもたちがイギリス全土から、何時間、どれだけ電話しても、電話代はタダです。フリーダイヤル制になっております。一体なぜ電話代がタダなのか。それは、ブリティッシュテレコムという電信電話会社が、企業の社会貢献活動の一環としてすべての電話代を負担してくれているからです。ですから、子どもはどこから何時間電話してもタダなのです。

もう一方で、この電話会社は、あらゆる電話機を設置しているところにチャイルドラインの表示をして、子どもたちにその存在を知ってもらうような協力をしてくれております。

イギリスでは、BBCのような国営放送のほか、イギリス各地には民放、ラジオ局やテレビ局があります。放送法によって、番組のうちの7パーセントは公共のための、つまり、コマーシャルのない番組をつくるということが、電波法という公共の電波を使うことの条件としてあります。

したがって、この7パーセント枠の中で、民放各局は、さまざまなボランティア活動を人々に知らせていくということをやっているわけなのですが、その中で継続的に、ラジオやテレビで1日中PRをしてくれているのがチャイルドラインです。「チャイルドラインは、あなたのこと待っていますよ」「あなたは1人じゃないですよ。いつもあなたのことを、いつもあなたの話を聞きたいと思っているボランティアの人たちがいるのですよ」ということを、毎日毎日のように呼びかけているわけなのです。

そして、ボランティアというのは、ただ個人だけではなくて、企業や、さまざまな関係機関も協力し合って、子どもたちのために、いつも心の窓口を開けているということです。

心の居場所づくりを

先ほど私がお話をしましたプレーパークは、地域での子どもの居場所です。今、御紹介しましたチャイルドラインは、地域の居場所ではなくて、子どもたちの心の居場所です。私たちは、子どもの居場所づくりと言いますけれども、フィジカルな、地域の中の居場所だけではダメです。もうひとつ、最も大事な、子どもたちが安心して、自分自身を見つめ、自分自身を回復してもらえるような心の居場所がなければ、地域にいくら居場所があっても、それは骨抜きのようなものです。

私たちは、子どもたちの居場所、子どもたちの縁側をつくろうというのであれば、地域の居場所と同時に、心の居場所づくりということを考えていかなければならない。そのときに、一番大事なのは、やはり「基本になる哲学」です。

実験ラインの開始

このチャイルドラインを通して、私たちは大変なことを学びました。私たちは日本でのチャイルドラインの取組みをするにあたって、今から10年ほど前、2年をかけて勉強会を開いて、イギリスに行ったり、イギリスからボランティアの人たちを呼んで話を聞いたりしたわけですけれども、ようやく、今から9年ほど前に、実験ラインというのをスタートさせました。

2週間×24時間限定で、世田谷区内の小中高生全員に教育委員会の協力をいただき、カードを配って、電話をかけてもらうようにしました。何と、2週間で1,069件の電話がかかってきました。第2回目の実験ラインでは、1,200件を超えるました。ぴったり60パーセントが小学生でした。

この実験ラインを通して、私たちの予想に反する2つの大きな出来事がありました。

一番多かった内容は？

1つは、電話をかけてくる内容だったのですけれども、マスメディアの人たちを含めて、いろいろなことを聞いてきます。「実験ラインをやったそうですね。1,000件を超えたか。どんな電話の

内容が多かったですか」と聞いてきます。特に、このように聞いてきます。「子どもたちは、どんな悩みや苦痛を訴えますか」ということを、新聞やテレビも、いろいろなところが全部聞いてきます。専門家も、そうやって聞いてきます。私たちも、どんな悩みや苦痛を訴えてくるのだろうと思いました。

ところが、かけてくる電話の中で一番多かったのは何かと言いますと、悩みや苦痛を訴えてくる電話ではなかったのです。一番多かった40パーセントをはるかに超えた電話の内容というのは、今日一日の報告、友達の噂話、自分の自慢話。「ねえねえ聞いて、こんなことあるんだけど…。」そういうような話が一番多かったのです。そして2番目に、苦痛や悩みを訴えてくる電話だったのです。

自由な目と耳と心で子どもたちの心からのメッセージを受け止める

そのことから、私たちはいくつかのことを学びました。いかに私たちの子どもたちを見る感性が鈍っているかということを感じました。同時に、いかに私たちは先入観にとらわれているのかということがわかりました。最後に、いかに今の子どもたちが孤独であるのかということもわかりました。つまり、じっくりと時間を取って受け止め、聴くこと。「聞く」というのは、「もんがまえに耳」と書く「聞く」ではなくて、俺は青少年指導者だ、教育の専門家だ、子育てのベテランだ、親だという、そういった肩書きを背負って耳を傾けるのではなくて、自由な目と、耳と、心で受け止めていく、耳偏の「聞く」のほうでしょうか。そういうことの大切さということを感じました。

「そうか、青少年の問題だ、青少年にいかに居場所をつくるのか」「いかに子どもたちのためにプログラムをつくって、体験やさまざまなボランティア活動をしてもらおうか」という、もっと以前の、一番大事な原点があるのではないか。

それはつまり、子どもたちの心からのメッセージを受け止めていくということ。これなしに、さまざまな活動はあり得ないのだということを、私たちは、そこで改めて学んだわけなのです。

これだけ私たち日本の社会では、子どもたちの教育に関しては熱心に議論します。子育てに対しても熱心に議論します。さまざまな施策もたくさんやっています。しかし、にもかかわらず、なぜ子どもたちの問題が顕在化し、またたくさんの問題が起こってくるのでしょうか。

それは、私たち大人社会と子ども社会の間に大きな「ズレ」があるのでないかと思うのです。つまり、大人が子どもたちのメッセージを受け止めていないのではないか。これは、チャイルドラインを通して、一番大きな、私たちが学んだことなのです。

厳しい責任を課されるボランティア

私たち世田谷チャイルドライン、この活動は今、全国で60カ所ぐらい広がったのでしょうか。一人前のボランティアになるためには、約1年半の研修をするということになっています。応募用紙と作文を書いて、書類審査の上、パスをした人が自分で1万5千円のお金を払って12コマ位の授業を受けます。7割以上出席しないと、自動的に落とされてしまいます。

ボランティア活動というのは、気軽に、好きなだけ活動できるものもあれば、厳しいボランティア責任というものを課される活動もあります。多様です。チャイルドラインの場合は、電話を受ける人たちに厳しいボランティア責任を課しています。

そして、「やっと講義などの授業が終わった。やれやれ、これで一人前の普通のボランティアになれるのか」と思ったら大間違いです。そこで個人面接が待っています。「あなたは電話を受け止めるというのはあまり得意そうではないから、お金集めに回りましょうね」「ポスター貼りをやりましょうね」「今度の日曜日にやりますが、みんなでイベントをやるほうに回りましょうね」…。適性を見ながら、電話を受けるということができない人もおります。研修中に、「自分はもう無理だ」と思う人たちもたくさんおります。

では、「電話の受け手になろう」ということになりますと、今度は1年間のインターン研修が待つ

ております。そこで、さまざまな電話に関するケースの対応の勉強をしまして、1年半経って、普通のボランティアとしてスタートします。

もちろん、この活動はイギリスも日本も、すべてのボランティアが事務局の運営からお金集めまでやっていくということになります。ボランティアがたくさん働くためには、やはり、それをコーディネートしていく人が必要だから、私たちも1人だけ有給のスタッフを雇って、ボランティア活動をみんながやりやすいようなコーディネーター的役割をやっていただきます。

こうした仕組みの中でやっていくわけなのですが、この電話を受けるボランティアということに対するイメージというのも、実際にやってみると、がらっと変わりました。

私たち世田谷チャイルドラインの場合は、自分が電話を受けている、受け手のボランティアになったときには、それを口外できないことになっています。したがって、電話を受けているボランティアは、親しい近親者以外は、自分がそういうことをやっているということを言いません。なぜかと言いますと、子どもたちの話の内容のプライバシーを守っていくことと、もうひとつは、こうした活動をしているボランティアが危害を加えられないような安全策を取っていくためでもあります。

こうしたこと、生涯、表彰されることもないわけなのですけれども、実は職業はさまざまです。もちろん私たちは、その人たち受け手の名前も職業も公表しておりません。メンバー同士も、自分が言わない限りは知りませんが、「チャイルドラインで子どもたちが寄せるメッセージは、学校とは全く違う」ということを、実験ラインに参加した先生たちもおっしゃいます。

決定権は子どもの側に

そして、どんなタイプのボランティアに子どもたちが長くしゃべったかというデータを取ってみますと、予想に反することがありました。まったく予想に反することが起こりました。

チャイルドラインに限っては、子どもの側に決定権があります。電話をしてみて、「こいつは感じ悪いな」、「嫌だな、こんなやつには話したくないな」と思ったら、子どもは電話を切ることができます。これは、子どもに主導権があり、決定権があるということです。

考えてみると、日常の暮らしの中に子どもたち自身が自己決定できるものがどれだけあるでしょうか。家庭では、親が物事を決めます。学校では、先生やさまざまなルールがあって、みんなで話し合って決めなければなりません。塾でも先生たちが物事を決めます。

悩みがあるといって相談にでも行くかということになると、おそらく、子どもがサンダル履きで、「おじちゃん、おばちゃん、私、悩みがあるんですよ」というわけにはいかないでしょう。必ず、そこにカウンセラーや、さまざまなサポートをしてくれる大人がそこにいます。

でも、電話のよさは、子ども自身が嘘でも話せる、つくり話も話せる。本当か嘘かはわからないのです。そして何よりも、子どもに自己決定権があるということなのです。したがって、電話を受けるわれわれボランティアやスタッフは、とにかく子どもに、また電話をしてもらえるように、細心の注意を払って、一生懸命子どもの話を受け止めていきます。

したがって、私たちチャイルドラインのモットーは「一期一会」です。ひとつの電話に全ての魂を傾けて、子どもたちの、この1回だけの機会を、最大限の心で受け止めいこうということをやっていきます。

子どもはどんな人に長くしゃべったか？

こうしたボランティアの実験ラインを通して、こういうデータを取ってみました。どんなタイプのボランティアが、子どもが一番長くしゃべったかということです。これは実は私たちメンバーに大きな衝撃を与えました。

まず、年代です。受け手の年齢が若ければ若いほど、長くしゃべりました。つまり、20歳に近け

れば近いほど、長くしゃべりました。今、私たち世田谷チャイルドラインでは、電話を受ける受け手は、20歳から50歳までということになっています。なぜ50歳にしたか。実験ラインを通して、私たち東京世田谷の場合は、どうも50歳を過ぎると、子どもたちの話をよく聞くということが不得手になることがわかりました。

チャイルドラインのモットーは、「教えない、指導しない、助言しない」ということだからです。大人が電話を通して物事を教えてあげる電話ではない。指導してあげる電話ではない。助言してあげる電話ではない。じゃあ何をするのか。ただとにかく、ひたすら聴く。この一点張りです。

これは、あくまでもただ単なる統計ですが、男女の差、男女の違いでは圧倒的に女性のほうが、子どもたちは長くしゃべりました。なぜでしょうか。これはいまだに、何となく女性のほうが受け止めしていくということ、子どもたちにとって話し易いのでしょうか。

それから、比較的、職業柄から言いますと、「教えてやらなければいけない、指導してやらなければいけない、助言してやらなければいけない」という職業的使命感が、もう、とうとう、DNAの中にまで染み込んでしまっている職業の人は切られていきました。

それから、青少年の専門家だと豪語する人たちも、どんどん切られていきました。そして、青少年の指導者として生き甲斐を感じ、その人生のために一生を捧げているような、頑張っているタイプの人も、残念ながらどんどん切られていきました。もうひとつは、人生の達人と言っている人たちです。人間、こうあるべきだ。人生は、こうあるべきだということを雄弁に物語っている人たち、これも、どんどん切られていきました。

では一体、どういうタイプの人たちが切られなかつたのか。女性で、20歳に近くで、まず、すぐだまされるタイプです。電話をします。「お姉ちゃん、実はもう僕は今日、死のうと思っているんだけど」「え、どうしたの。死ぬの、やめてよ。もうちょっと話を聞いてよ」

子どもは、いかに自分の不幸な物語を語るかについては雄弁であります。すぐだまされやすいということは、すぐ信じるということでしょうか。そういうタイプ。そして、明確な教育理念を持たないタイプ。子育てについての経験がない人たち。自分の人生観をも明確に持てなくて悩んでいる。かつて傷付いたり、悩んだりした経験が、今でも癒されずにいるタイプ。こういうタイプが一番、子どもは長くしゃべったわけです。うちの学生たちです。面白いものです。

原点に立ち返ること

つまり、私は何を言いたいかというと、そんなことを強調したいわけではなくて、それだけ私たちの子どもに対する子育て観や教育観というのが硬直していたということなのです。

また一方で、子どもたちのためにボランティアができるのは、何も立派な子どもにする子育て観をもったり、教育観を持っている人だけでなくてもいいのだということです。つまり、子どもたちの心のままを受け止めることができるということがとても大事なのだということなのです。

私たちは、子どもたちの問題や子育ての問題、教育の問題、ボランティア活動を続けていくうちに、またその専門家としてさまざまな研鑽を続けていくうちに、一番大事な子どもたちの心のメッセージを受け止めていくという原点を忘れてしまっているところがあるような感じがするわけです。

いつの時代にも、いつの時間でも、一番私たちが大事にしなければいけないのは、私たちの心のキャンパスを真っ白にして、子どもたちのメッセージを受け止めていこうという、そういった私たちの姿勢を忘れないこと。

その原点をいつも保ち続けていきつつ、子どもたちや、子育てや、子どもの問題に取り組んでいく活動のノウハウを、私たちは、そこからいつも検証し、反省し、つくり直していこうという努力をするということがいかに大事なのかということを、こうした活動を通して学んだわけなのです。

メッセージを受け止め、活動のあり方を常に問いかける

私たち世田谷のボランティアは、もちろん、子どもの問題だけをやっているわけではないのです。環境問題をやっているボランティアもいれば、海外協力をやっている人もいる。消費者運動をやっている人もいれば、戦争を許さない女たちもいる。障害のある人自身が当事者となって、街の移動交通の問題を切り開いていくという、そういった人たちもいれば、地域の再生というものを願って自らが立ち上がってまちづくりに取り組んでいる高齢者の人たちもいます。

しかし、プレーパークやチャイルドラインを通して学んだことというのは、子どもたちの問題だけではなく、私たち自身の活動のあり方の原点を学んだような感じもするわけなのです。

例えば、私はバングラディッシュという国の人々が、自分たちの力で、自分たちがボランティア運動をして、村をつくり、地域社会をよりよくしていくということを応援するボランティア活動に参加しています。こうした活動を30数年続けていきますと、どうしても日本人の価値観や、文化や、考え方のほうからものを見て、当事者の人々が何を原点にしようとしているのか、そして、時代とともに移り変わり、また、時代を越えて、社会に対して、世界に対して訴えていく原点は何なのかということを、どうしても見失ってしまうことがあります。

常に私たちは心のキャンパスを真っ白にして、バングラディッシュの人々や、また、特にバングラディッシュの人々というよりも、バングラディッシュの人々の、一人ひとりの心からのメッセージを受け止めて、私たちの活動のあり方を常に問いかけていくということをやらなければいけないということを、このチャイルドラインやプレーパークから学んでいきます。

と同時に、ボランティア活動は、ボランティア活動をする対象に対して、私たちは教育してやるのだ、私たちは指導してやるのだ、私たちは助言してやるのだというような視点ではなくて、ボランティアを通して相手から学び、常に私たち自身の生き方や活動のあり方を問いかけていくということなしにボランティアはあり得ないのだということがわかつてきます。

社会の一員としての自覚も

そして、例えばプレーパークなどを通して、自分の責任で自由に遊ぶということなのですが、この自分の責任で自由に遊ぶ。つまり、私たちは常に社会の主役として、自分たちの責任で社会をつくっていくのだという自覚なしに、自分の責任で自由に遊ぶという子どもたちの自由な遊び場を維持することはできないのだということも学んでいきます。

「良心の契約」

ボランティア活動ということを考えていきますと、ボランティア活動の絆というのは、結構あいまいなものです。私は学生たちによく言います。「ボランティア活動というのは『良心の契約』による活動だ」ということを。「また、きざなことを言う」と学生に言われます。「ボランティアをしたいという人と、ボランティアという私たちの活動を受け入れてくださる相手や組織との間に交わしていく良心の契約です」と言うときれいですね。

でも、この「良心の契約」ほど、いい加減なものもないです。今日、雨が降っているか、お天気によっても、良心は結構左右されます。夫婦喧嘩して、気分がいいか悪いかによっても、結構左右されます。懐にお金がいっぱいあるかないかによっても、結構左右されます。

昨日は優しい自分になって、「よし、こういった困った人たちのために、自分は何か手を差し伸べよう」と思うのだけれども、今日、自分の懐の財布をのぞいてみると、「何だ、よく考えてみると自分はお金があまりないよね。こんなに自分が貧乏なのに人の手助けなんかやっても仕方がないよな」と思ったりします。「雨が降るから、今日は行くのをやめようかな」と思ったりします。そのときの気分にも左右されます。ですから、良心の契約というのは一見美しいのですが、結構あいまいなものです。

ボランティアに対して、こういう悪口を言う人もいます。「ボランティアなんか、あてにならないよ。何しろ、そのときの気分だもんね。自発性とか、主体性とか言うけれど、相手方のそのときの気分によって左右されるもんね。ボランティアなんか受け入れるよりも、金で雇ったほうがいい」という人もいます。

そういう人は、金で雇えばいいと思います。しかし、これは雇用関係による労働協約になります。金の切れ目が縁の切れ目です。ボランティアは、ついついお金に関係なしで働いてしまいますので、あるときには雇用関係を越えて役割を果たしていく場合もたくさんあるわけです。

鍵は信頼関係とコミュニケーション

では、このあいまいな「良心の契約」というのは、一体どうすればしっかりとした、信頼関係に基づいた契約になっていくのでしょうかということです。

一番大事なのは仲間です。1人の意志は弱いです。しかし、友達と3人で一緒に活動すれば、私が、「お天気が悪いから」と言って参加しなければ友達に怒られます。約束もあります。つまり、ボランティアを通してつくった仲間が助けてくれます。そこで仲間同士の信頼関係というものが、自分の無かった勇気を掘りおこしてくれます。と同時にボランティアとボランティアを受け入れてくれる側との信頼関係の絆が深まれば深まるほど、それは堅固な絆になっていきます。ボランティア活動というのは、コミュニケーションの深まりによって大きな効果や力を發揮していくことができるわけです。

それをもうひとつ、子どもたちの立場で考えていきますと、大人社会と子ども社会との信頼の絆というものをいかにつくるかということなしに、子どもたちに対するボランティア活動はあり得ないということです。

ということで、どうも何か、ボランティア活動の新しい可能性ということとはかけ離れてしまつたような感じがして、ちょっと心配しているのですけれども、しかし、私が今日ここで強調したいのは、どんなボランティア活動も、一番大事なのは、ボランティアをする側と、ボランティアを受け入れてくれる側との信頼とコミュニケーション。相互の理解の絆なしにあり得ないということです。こうした視点から、もう一度、私たちの子どもに対する姿勢や、子どもたちに対するあり方ということを見直してみたいというふうに思うわけです。

もう一方で、子どもたち自身がボランティア活動を通して社会との信頼の絆を結び直していく、そういう機会やチャンスを私たちはいかに用意するかということも、私たちはもっともっとやっていかなければいけないと思います。

皆さんにお渡しましたペーパーの中に【→P26】、今日は短い時間でしゃべりきれないのですが、子どもたちがボランティア活動を通してどのように育っていくかということをいくつか、紹介しています。本当の自分と出会うときとか、私は青少年がボランティアを通して、このように育っていくのだということの原点を感じさせられたイギリスでのエピソードなどが、ちょっとしたストーリーとして書いてあります。今日は、こんなことを話していたのでは、いくら時間があっても足りませんので、ちょっと、私の子どもたちを支援していくという、そういった経験からお話をさせていただきました。

緩やかな横のネットワークを

最後の結びなのですから、ひとことなのですが、今日のお話の最初に戻ります。私たちは、ボランティア活動、さまざまな違った活動をしている私たちグループ同士が、横に緩やかなネットワークをつくることによってボランティア協会というものをつくりあげました。そして、これから活動を志す人たちに対する、さまざまな応援をしています。

また、地域で起こっているさまざまな問題を私たちは取り上げて、それをプログラム化して、地

域の人々にいつも投げかけています。「こんな問題に取り組みませんか、こんなことに対して、みんなで一緒にやりませんか」その中で、とても重要な課題になっているのが、先ほど言いました子どもたちの問題なのです。

そうした活動が、なぜ広がっていき、世田谷区という中で定着してきたのか。それは、実は違った立場の活動をしている人たちが、同じ共通の目的のために、緩やかな横のネットワークをつくったからなのです。

私たちは、それぞれのグループや組織が、地域の中で子どもの問題に取り組んで孤立していくだけではなくて、子どもの問題に取り組んでいる組織も、そうでない組織も、未来の子どもたちのために、自分たちの活動だけではなくて、次の時代を担っていく子どもたちのために、横にネットワークとしてつながりながら、新たな子どもを支援していく運動をつくっていくということをやっていかなければならないだろうというふうに思うわけなのです。ですから、今日の結びはネットワークの大事さ。ネットワーク、つまり、横につながることの大事さだと思うわけです。

自分の活動だけに満足しないで縁を結ぶ

そのためには、人と人、組織と組織、人と組織をつなぐ役割をする人たちが、とても大事だと思います。レジメには深く書いていないのですが「縁を結ぶ人」です。日本の社会からは、どうも「縁結びの神様」が消えてしまっているような感じがします。昔は、「縁結びの神様」がいて、男女を結び、隣近所を結び、若い世代と経験の深い高齢者とを結び、さまざまなかたちで一緒に立場を越えて働くような縁を結んでくれる人々がたくさんいました。日本の社会は、どうもその人たちが、消えています。

これを英語で言いますと、「コーディネーター」と言います。つまり、人と人、人と社会を結んでいく、そういう縁を結ぶ人の役割は重要だと思います。おそらく、これからのキーワードになるだろうと思います。

私たちは、自分の活動だけに満足しないで、人と人、組織と組織、人と組織を結んでいく、その縁を結んでいく役割。縁結びと言いますが、神様にはなれませんから、そういう役割を果たしていくということが大事だと思います。

ですから、ぜひこれを機会に、そういう人との縁を結ぶ役割をいかに私たちは地域の中でやろうかということを、もう一度考え直していただけるようになるとありがたいなと思っています。

ということで、まとまりのないお話で、結局、このペーパーの中身は、あまり話をしていませんが、あとでちょっとご覽になっていただくとしまして、また、シンポジウムの中で話しきりないことがあれば、お話をさせていただきたいと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。